

モーツアルトの「ピアノソナタ10番」、若々しく元気潑刺に、楽譜を忠実に再現。年齢相応のしっとり感、微塵もなし。飾りっ気なしの生っぽい音色とストレート表現、面取り施し手造りよそ行きスタイルの期待には拍子抜け。2楽章、駆り立てられての居心地、中腰の平衡感覚、どっしり落ち着きの手前、過度に深刻ぶることはなし。3楽章、ありのままでビビッド、可愛いモーツアルト・トーンのくすみ、まみえることなし。

ベートーヴェンの「ピアノソナタ31番」、1楽章、豊かなニギワイ、沢山の音が聴こえてくる。トラジディなスパイスの顔見せ、独特トリルがかった雰囲気支配、ドラマチック展開の広がり積極性。屈折した叙情性のイメージを払拭、論理的熱っぽさ、新鮮な躍動ワクワク感。2楽章って、こんなに活気があったつけ。3楽章、最初の嘆きの歌、心を沈め未来を信じて衷心からの祈り、過剰な悲壮感なし。上方のフーガ、ベタッと重苦しさを引き摺る様、表情少なく音量の大小で制御、ほつれ合いの高まり。2度目の嘆きの歌、シリアスな悲しみノーマルな喜怒哀楽にて、痛々しい絶え絶え切なさとは別スタンス、下方のフーガ、鎮静化に向ってときほぐす、最後にはしっかりと収まりの安定。後期ソナタ・シリーズの一環、一貫してのポジティブさに少し驚き、これもありと明るい気分。

シューマンの「交響的練習曲」、身構えて慎重、襟を正し主題スタート。手を変え品を変え、気忙しくシャカリキ邁進。いろんな表情の特徴づけ、プレゼンできる喜びにあふれ。練習曲Ⅲで、ネジ巻きスピードアップ、真摯モードへの突入、力強くバリバリほつれなし。変奏Ⅶ、教会の伽藍、重厚なオルガン響く印象。その後、作曲家の指示に応え、急かされる様に疾走、あたかも憑依モード。変奏Ⅸ、ザワメキから静寂な世界へ、ドキッとしてたまらない静謐・甘美さ、コントラストの妙。今日は遺作の5変奏がここに入る、オイゼビウスの領域の拡大、物静かなスペースの広がり、ロマンチックワールドに心休まる。私にとって、この曲はリヒテルさんのレコードが最初、ザルツブルグのクレスハイム宮、遺作変奏は違う箇所に挿入されていたような。フィナーレ、フロレスタンの勢力が復活、クライマックスこれでもかこれでもか、ゾーン状態で大団円。(2018.12.17)

モーツアルト：ピアノソナタ 10番 ハ長調 K.330

ベートーヴェン：ピアノソナタ 31番 変イ長調 Op.110

シューマン：交響的練習曲 Op.13 [遺作変奏付き]  
(アンコール)

ショパン：ノクターン 2番 変ホ長調 Op.9-2

---

ブラームス：ワルツ Op.39-15

ショパン：ワルツ 6番 変ニ長調 Op.64-1「小犬のワルツ」>

---